

フィリッポ・デ・ヴィーヴォ「眺望か隠れ場か？ ミクロヒストリー、大きなスケールについての歴史学」

Filippo de Vivo, “Prospect or Refuge? Microhistory, History on the Large Scale”, *Cultural and Social History*, 7-3, 2010, pp. 387-397.

紹介

同論文は、ジョン・ブルーアの論考「ミクロヒストリーと日常生活の歴史」に対するデ・ヴィーヴォの応答である。ブルーアは、ジェイ・アプルトンの「眺望－隠れ場」理論をミクロヒストリーに応用することを提唱した。デ・ヴィーヴォはこの提言を肯定的に受け取り、いくつかの点で発展させようとしている。

○ミクロヒストリーの方法¹

- ・ミクロヒストリーの方法の核心にあるのは、個人、地域、出来事を適切な歴史的コンテクストにおいて近くから研究することである。この方法は伝統的な政治史に含まれる目的論とエリート主義に対する解毒剤となり、1950-60年代に実践された社会史の還元主義的な決定論に対するオルタナティブとなった。
- ・ミクロヒストリーを研究対象の大きさと同一視するのはよくある誤解である。
- ・ジョン・ブルーアによれば、小さいものとは、近くから観察することにより生じる研究者と研究対象との間の距離である²。

○さまざまなタイプのミクロヒストリー

- ・ミクロヒストリーは一つのタグとしての役割を果たしているが、実際にはその主題、史料、目的はさまざまである。
- ・たとえば、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユー』(1975年)³とカルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』(1976年)⁴は、このジャンルの始まりとして共に言及されることがあるが、大きく異なる研究である。

¹ 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

² John Brewer, ‘Microhistory and the Histories of Everyday Life’, *Cultural and Social History*, 7-1, 2010, pp. 87-109 [水田大紀訳「ミクロヒストリーと日常生活の歴史」『パブリック・ヒストリー』2号、2005年、19-37頁]。

³ 井上幸治・渡辺昌美・波木居純一訳『モンタイユー——ピレネーの村 1294～1324』上・下、刀水書房、1990-1991年。

⁴ 杉山光信訳『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房、2012年。

- ・ラデュリは一つの村の「全体」史('total' history)を書こうとしたのに対して、ギンズブルグは全体についての想定を描きなおすためにケーススタディを利用した。
- ・マイクロヒストリーの実践がさまざまに異なることはその実践者たちによってもよく認識されている。たとえば、ロバート・ダーントンの『猫の大虐殺』⁵はジョヴァンニ・レヴィによって猛烈な批判を受けているし、ラデュリの『モンタイユ』は *Quaderni storici* 誌においては熱狂的な議論の対象にまったくならなかった。
- ・エドアルド・グレンディは、マイクロヒストリーを文化的なものと社会的なものに区別している⁶。

○ジョン・ブルーアの指摘

- ・ブルーアは、多様性の中に統一を見出す方法として、マイクロヒストリーと日常生活史(Alltagsgeschichte)の両者に共通する次の三つの「家族的類似」を指摘している。

①1970-80 年代に両者が生まれた政治的・思想的コンテクスト

政治的な幻滅(自由民主主義と消費社会に対する)と思想的な幻滅(近代化理論と非人間的な構造主義に対する)という二重の幻滅についてのブルーアの議論は非常に説得的だが、彼は否定的要素をあまりに強調し過ぎているかもしれない。

②リアリズムに対する深いコミットメント

ブルーアは文学や映画におけるネオ・リアリズムとのアナロジーによって、マイクロヒストリーの歴史家がリアリズムに深くコミットしていることを要約している。このことは、実証主義を超える物語りのポテンシャルとリアリズムの可能性とを評価可能にしてくれるという点で特に有益である。著者はブルーアの議論にさらに二点を付け加えている。第一に、哲学的スタンスとしてのリアリズムは、イタリアにおいてはファシズム崩壊後も政治的な価値を持っていた(そして今も持ち続けている)ということ。第二に、マイクロヒストリーのネオ・リアリズムへの恩義は、より最近の実験的な傾向と密接に関係しているということである。特に、参加と客観性の結合、クローズ・アップとロング・ディスタンスとの間の連続的な変化、作品の中に作者が現れることや作者と読者との対話の強調は、マイクロヒストリーの歴史家がネオ・リアリストであるイタロ・カルヴィーノからだけでなく、カルヴィーノの以後の全く異なる作品からも影響を受けていることを示している。

⁵ 海保真夫・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』岩波書店、1986 年。

⁶ 「文化的マイクロヒストリーの代表がギンズブルグであり、社会的マイクロヒストリーの代表がレヴィである。」

③歴史家とその研究対象との間の距離についての感覚

マイクロヒストリーを理解するために、また、それとは多少異なる日常生活史を理解するために、ブルーアは「隠れ場」(refuge)と「眺望」(prospect)という二つの相反する歴史記述の形式を考えるように提案している。ブルーアはこうした概念を人文地理学、特にジェイ・アプルトンの景観理論から借用した。ブルーアによれば(アプルトンの説明とは少し異なるが)、マイクロヒストリーは「クローズ・アップであり、小さなスケールに関するもの」である限り、「隠れ場的歴史学」('refuge history')の一部である。

「隠れ場的歴史学」は親密なものに(the intimate)、つまりミシェル・ド・セルトーのいう相対的な自由の場としての日常生活に関係している。それに対して「眺望的歴史学」('prospect history')は、距離を隔てた観察に、つまり視野の広さ、大きな規模、長期持続、一般化、歴史家が研究対象から距離を隔てた態度を取ることに関係している。この種の歴史学は社会科学や数量的な方法と結びついている。

→著者によれば、これは刺激的な見解であり、真剣に受け止めるだけではなく、さらに発展させる価値がある。

○「眺望—隠れ場」理論とマイクロヒストリー

- ・アプルトンの影響力ある景観理論によれば、「景観における美的な喜び(aesthetic pleasure)は、観察者が自分の生物学的な必要を満たすのに好ましい環境を経験することによって由来している」⁷。つまり、生存というのは見られることなく見る能力に依存しているので、人間と動物(獲物としてであれ捕食者としてであれ)は見たり(眺望)隠れたり(隠れ場)するチャンスという点で風景を評価することになる。

→これがアプルトンの生息地理論(habitat theory)であり、眺望—隠れ場はこの理論の一つの側面である。

- ・このような洞察をマイクロヒストリーの議論に適用するのはいくぶん逆説的である。なぜなら、アプルトンの人類学的/動物行動学的説明は、マイクロヒストリーの歴史家が拒絶しようとしているある種の唯物論的な決定論を示しているから。
- ・しかしながら、こうした洞察はギンズブルグのマクロ歴史的、形態学的な人間本性の探求に関係しており⁸、さらに、マイクロ分析の起源を先史時代の狩人にまで遡るギンズブルグの「徴候」論文に特に関連している⁹。

⁷ Jay Appleton, *The Experience of Landscape*, Chichester, 1996 (originally published 1975), p. 62 [菅野弘久訳『風景の経験——景観の美について』法政大学出版局、2005年]。

⁸ C. Ginzburg, *Ecstasies: Deciphering the Witches' Sabbath*, New York, 1991.

⁹ C. Ginzburg, 'Clues: Roots of an Evidential Paradigm', in Ginzburg, *Myths, Emblems, Clues*, London, 1990, pp. 96–127 [竹山博英訳「徴候——推論の範例の根源」『神話・寓意・徴候』セ

- ・ブルーアが「隠れ場」に包含される観察の近さを強調していることは、マイクロヒストリーの歴史家による研究対象へのコミットメントを要約している。
- ・アブルトンの理論では、人間や動物は隠れるための手段として隠れ場を評価するが、ブルーア自身がマイクロヒストリーの歴史家に本質的な特徴として強調しているのは、自分たちの研究方法や研究過程を間違いも含めて可視化したいという彼らの実践とスタイルである。ギンズブルグとプロスペリは著作の冒頭で、もし歴史が料理であるならば読者を台所に直接連れて行きたいと述べている¹⁰。

○眺望と隠れ場の接続

- ・アブルトンが「眺望」と「隠れ場」を対立するものとして扱うことに反対していることも、彼の理論がマイクロヒストリーに有益な仕方である理由の一つである。景観の「戦略的価値」は「眺望」と「隠れ場」の両方を結びつけるところに存在する。サッカーの攻撃とディフェンスのように、どちらかが優位に立つことはあっても、両方が必要なのである。このことは、ジャック・ルヴェルが「スケールの戯れ」(jeux d'échelles)と表現したマイクロヒストリーの戦略にも当てはまる¹¹。
- ・ギンズブルグにとって重要なのは、個人の生と歴史の大事件との間の相互作用を描くことによって、焦点距離とクローズ・アップを組み合わせることである。アルブレヒト・アルトドルファーの絵画『イッソスの戦い』では、絵画のすべての要素に同時に焦点が当てられている。こうした見方は人間の目には不可能であるが、ローカルとグローバル、瞬間と長期、個人と集団、私的なものと公的なものの接続を示している。それと同じように、マイクロヒストリーは焦点をビジョンと組み合わせて、マイクロとマクロを関連付けようとするのである。
- ・ブルーアが証明しているように、眺望と隠れ場は必ずしも対立するのではない。
- ・多くのマイクロヒストリーは統計データも利用している¹²。フィリップ・ベネディクトは、ダーントンの『猫の大虐殺』の書評を書き、質的と量的という古い対立を超えていくべきだと論じていた¹³。
- ・このことはイタリアにおける幾人かのミクロストリアの歴史家(エドアルド・グレンディ、ジョヴァンニ・レヴィ、ラウル・メルツァリオ)の場合にも真である。彼らは自分たちの研究が歴史人口学に、特に人口動態の基礎単位としての家族の歴史に貢献して

りか書房、1988年、177-226頁〕。

¹⁰ Carlo Ginzburg and Adriano Prosperi, *Giochi di pazienza: Un seminario sul Beneficio di Cristo*, Turin, 1975.

¹¹ J. Revel (ed.), *Jeux d'échelles: La micro-analyse à l'expérience*, Paris, 1996.

¹² Pat Hudson, "Closeness and Distance", *Cultural and Social History*, 7-3, 2010, pp. 375-385.

¹³ Philip Benedict, "Storia interpretativa o storia quantitativa?", *Quaderni Storici*, 58, 1985, pp. 257-69.

いると考えていた。

- ・もっと一般的なレベルでは、マイクロヒストリーは社会理論との対話にもコミットしていた。アナールの数量史(quantitative history)のように、マイクロヒストリーは科学的に妥当な歴史学を作り出そうとしていたのである。
- ・しかし、フランソワ・シミアンがフランスの社会史家たちに、個を避けて反復に焦点を当てるように教えたのに対して、マイクロヒストリーの歴史家たちはケーススタディを利用し、それを検証可能な(verifiable) (あるいは反証可能な)「実験」として扱った¹⁴。ギンズブルグの初期の論考のひとつにマルク・ブロックの著作への書評があるが(1965年)、そこではブロックの *expérience* という言葉は、「経験」(*esperienza*)ではなく、フランス語の用法に従って「実験」(*esperimento*)と訳すべきだと強調されている。
- ・マイクロとマクロをどのように接続するかは難しい問題であり、両者の関係はさまざまな形を取り得る。
- ・ギンズブルグにとって徴候が重要なのは、芸術作品の一見重要ではない細部からその作品の作者が明らかになるように、あるいは口を滑らしたことから無意識の抑圧された側面が明るみに出されるように、他の方法では見逃されてしまうような仕方で、大きな絵に何かを見ることを可能にしてくれるからである。
- ・マイクロヒストリーは、一見重要ではないもの、ほとんど言及されない普通のものから始めることもできるし、一見理解不可能なもの、奇妙なものに焦点を当てることもできる。そうした奇妙なものに焦点を当てるのは、奇妙さが魅力的だというのではなく、他者性(alterity)、つまり私たちの考え方 (あるいは文書を記録した人の考え方) と文書の中で明らかにされるものとのギャップを示しているからである。マイクロヒストリーのポイントは、そうした奇妙さをコンテキスト化によって理解することである。
➡ダーントンによれば、異文化を理解するには平均的なものより逸脱したもの(eccentric)を研究した方がよい。
- ・変則性(anomalies)への注目は史料の選択と関係がある。多くのマイクロヒストリーは、ルールからの逸脱が生じたためにそもそも存在することになった裁判記録を調査することから始める。ある行為や思想が記録されるのは、それが法律や正統な教義に反するからである。
- ・エドアルド・グレンディの「例外的な—正規な」という概念の骨子は、例外がルールを描き出してくれるということである。つまり、そうした例外はある社会の支配的な教義

¹⁴ Jacques Revel, 'Histoire et sciences sociales: Les paradigmes des Annales', *Annales E.S.C.*, 6, 1979, pp. 1360–76.

の研究に資することになる。ナタリー・デイヴィスが『帰ってきたマルタン・ゲール』¹⁵において示したように、マルタン・ゲールになりすました詐欺師の行動は、彼が利用しようとした（覆そうとしながら）家庭生活を支配する規範について教えてくれる。また、ベルトランド・ド・ロールがこの詐欺師を受け入れたことは、彼女が逃れようとしたルールについて教えてくれる。この意味で、例外的な史料の価値は、それがあまりにも当たり前になってしまっている正常を映し出してくれるという事実にある。

- ・さらにグレンディは、一部の集団において、ルールからの逸脱が規範を構成するにいたるほど頻繁に生じた可能性を指摘している。そうした変則性を研究するということは、制度的な記録や伝統的な歴史記述から抜け落ちた、当時は現実的で可能であったオルタナティブを見ることなのである。視点を変えることは、個人が大きな危険を冒しながらも自分自身のために作り上げることができた、限られた自由の空間を私たちに認識できるようにしてくれる。
- ・したがって、マイクロヒストリーにおいては、眺望と隠れ場は分析の諸要素として、また分析の異なる戦略として接続されている。二者択一の問いを立てるよりも、二つのアプローチを結びつける機会について問うべきである。
- ・研究している時代との距離や、利用可能な史料の量を考慮すれば、たどり着く結論がどれほど総合的で「マクロ」であるとしても、すべての歴史家は事例(samples)に取り組まなければならない。包括的であるということは単純に不可能である。
- ・そうした事例は、多かれ少なかれ広範囲に及ぶものかもしれないが、常に現実の一部に限定されている。事例を選択することはすべての歴史家に強いられており、歴史家は自分たちの選択の妥当性を評価しなければならない。
- ・マイクロヒストリーは、他の歴史記述の形態よりも、そのような選択を行なう上で歴史家を助けてくれる。なぜなら、マイクロヒストリーは歴史家が研究する事例(cases)を、「典型例」(examples)としてではなく「実験」(experiments)として認識するように促すからである。典型例はそれらを積み重ねることで仮説を確認するが、この方法には明らかな限界がある。それに対して、実験は特定の解釈を変えることを可能にしてくれる。

○マイクロヒストリーの三つの役割

①グローバルヒストリーやアトランティックヒストリーとの関係

マイクロヒストリーが個人と文脈、地域、国、さらにはグローバルなものとの接続を探索する方法は、近年の歴史研究の動向と共鳴している。ジョヴァンニ・レヴィにとって、パンを一つ買うというような一見単純な行動でさえ、相互接続された多くの要素に依

¹⁵ ナタリー・Z・デイヴィス（成瀬駒男訳）『帰ってきたマルタン・ゲール』平凡社、1993年。

存していた（小麦の生産時期や穀物の国際市場など）。グローバルヒストリーとトランスナショナルヒストリーは、ローカルなコミュニティと国際的なネットワークとの接続を理解する上で、異なる分析のスケールを有効に組み合わせてきた。ラーラ・パットナムは、社会史の将来に関する近年の特集において、マイクロヒストリーがアトランティックヒストリーにおいて果たすべき役割があると述べている¹⁶。それは、①人種的、地理的隔たりを超えた思いもよらない結びつきの重要な事例を指摘すること、②既成の慣習と〔現実の〕実践との間のギャップを強調すること、③空間的、時間的な境界設定に関してもっとオープンになるよう歴史家に促すこと、である。

②事件の研究との関係

かつて伝統的な政治史の中核をなしていた事件・出来事(events)の研究は、マイクロヒストリー的とみなし得る方法で再び流行している。しかし、事件の歴史(history of events)が事件史(histoire événementielle)のかつての誤りを乗り越えることは、接続を探し出すリーダーと拡大鏡とを組み合わせたマイクロヒストリーの方法を適用することではじめて可能となる。たとえば、イギリスの中世・近世の歴史家たちは、どのように一つのローカルな事件が国家レベルで長期的な影響を及ぼしたかを研究することの価値を提示してきた。このような研究のトレンドは、アメリカの歴史家エドワード・ミュアーによってすでに示されていたのである¹⁷。ミュアーが研究したのは 1511 年にウーディネで起きた大虐殺であり、彼はこの大虐殺をその地域を統治する国家の性質、諸権力とローカルな貴族、民衆との関係、カーニバルの文化など、さまざまなテーマと接続していた。

③社会史や政治史との関係

マイクロヒストリーは、政治史と社会史の隔たりを打ち壊すことに役立つ。伝統的な政治の語りや制度に対する批判が盛んに行われたのは、国民国家が繁栄し、福祉国家が人々の生活の中できわめて重要な存在となった時代であった。しかし、それから数年後に国民国家と福祉国家は自由市場資本主義の勝利によって深い危機に陥った。戦争や経済危機、気候変動といった近年の出来事は、私たちの生活において国家の役割がいかに重要であるか、あるいは重要であるべきかを示している。社会史家は近年、叙述の中に政治を再び取り戻そうとしている。そこで、スケールを縮小することによって異なる視点を組み合わせることが可能となる。つまり、制度を無視することなく社会を研究し、下からの歴史と制度の歴史、経験と規範とを組み合わせることができるのである。例えば、グレンディとオズワルド・ラッジョは、地方における権力の社会的ネットワークと政治

¹⁶ Lara Putnam, “To Study the Fragments/Whole: Microhistory and the Atlantic World”, *Journal of Social History*, 39, 2006, pp. 615–30.

¹⁷ Edward Muir, *Mad Blood Stirring: Vendetta and Factions in Friuli during the Renaissance*, Baltimore, MD, 1993.

的中心との相互作用を研究し、ジェノヴァ共和国全体の歴史を修正することができた¹⁸。マイクロヒストリーの歴史家のすべてが、ブルーアの「隠れ場」(打ち勝つことのできない力から逃れるための避難所)という概念に描かれているノスタルジックな共同体主義を共有するわけではない。たとえば、E・P・トムスンがマイクロヒストリーの歴史家に与えた影響は非常に大きかったにもかかわらず、彼の「保守的」な態度はレヴィによってはっきりと批判された。レヴィはトムスンと異なり、征服者である近代国家に対する、ローカルな社会のゆっくりとした、そして最終的には無駄に終わる抵抗を描くのではなく、ローカルな共同体と国家の制度の両方に深く影響を与えるような衝突の局面を描いたのである¹⁹。このようなタイプのマイクロヒストリーにとって、隠れ場は社会と国家の両方に対する私たちの眺望を変えるための手段となる。

¹⁸ Osvaldo Raggio, *Faide e parentele: Lo stato genovese visto dalla Fontanabuona*, Turin, 1990; E. Grendi, *Il Cervo e la repubblica: Il modello ligure di antico regime*, Turin, 1993.

¹⁹ Giovanni Levi, *Inheriting Power: The Story of an Exorcist*, Chicago, IL, 1988.